

## 斬首

二〇〇四年六月一五日、慎太郎は、起きると、いつもの通りテレビのスイッチを入れた。そして、テレビ画面に写し出された映像に息をのんだ。サンバとアリゾナ・コンパウンドで会ったポールが覆面テロリストに膝まずかされていたのだ。テロリストはポールの両脇に立ち機関銃で威嚇していた。覆面をしたテロリストは、自分達が沙漠のサソリの一員であることを宣言し、米国を侵略者として非難すると、「サウジ政府が獄中の同胞を七十二時間以内に解放しなければ、ポール・ダグラスを斬首刑にする」と宣言した。

この映像はもともとは沙漠のサソリによりインターネット上に公開されたもので、その一部がCNNを通じて報じられていたものだった。

続いて、テレビにはポールの身を案じる彼の妻スパポーン  
の姿が映し出された。

慎太郎は可哀想でその映像をまともに見ることは出来なかった。彼女は、淡々とポールがサウジのために長年貢献して来たことを語っていた。その淡々さに却ってやるせなさが増した。

米国に居るポールの息子は「どうか父を殺さないで下さい」と言っ、サウジアラビア政府、そして沙漠のサソリに対し彼の父を解放するよう必死で懇願していた。哀れだった。彼がスパポーンの子供のようには思えなかったからスパポーンは現地妻で継母なのだろう。

ポールの姉も「ポールは何も悪いことはしていない。ポールを殺しても何の解決にもならない」と必死で訴えていた。

米国の彼の町では、彼の解放を祈り、皆、玄関に黄色のりボンを飾っていた。そこからも彼の親しみやすく親切的な性格が伺いしれた。慎太郎は行き場の無い憤りを感じていた。

ポールはまるで城のように警戒厳重な郊外のアリゾナ・コンパウンドに住んでいたし行動も慎重だった。何故このよう

なことになったのか慎太郎は訝しく思っていた。帰宅途中に襲われたとの報道だったが、いったい何故彼のスケジュールが過激派の知るところになったのか。

遂に最悪の事件が起きてしまった。これまで、自爆テロ、コンパウンド襲撃事件などはあったが、このような誘拐事件はなかった。ソフトターゲットという無防備な民間人を狙ったテロは許し難いことだ。

ファイサリア・レジデンスのチェックポイントではガードマンが車両の嚴重チェックを行っているし、レジデンスの入口には軍の装甲車が配備されていて、その上には機関銃を持った兵隊が二、三人いる。セキュリティは万全だ。慎太郎も近くのレストランに行く時には周囲にいつも気を配っていた。しかし、ポールのように車に乗っている時に襲われたらどうしようもない。

慎太郎がポールと最初に会ったのはサウジと米国の合弁銀行・サンバの本店だったが、ポールはサンバのエコノミス

トとも知り合いで本業の軍関係の人脈の他にも石油関係、銀行関係と顔が広がった。

彼はテロリストの標的になりやすい立場にあった。それは本人も十分に承知していて、決して普通のサウジ人の誘いは乗らなかった。そこは、慎太郎と大きく異なるところだった。

慎太郎もかなり慎重だったが、時には自分でも思いがけない大胆な行動を取ることもあった。そのような大胆な行動によりサウジ人のシェイク・スルタンと巡りあい、そのスルタンの仲介で石油大臣と会えることにもなったのだった。しかし、治安が極端に悪化しているこのサウジでは、一歩間違えばポールのようにテロリストの餌食(えじき)になっていたわけで常に危険とは隣り合わせにあることも事実だった。

ポールの処刑まで、あと六〇時間か

慎太郎はそう思いながら石渡とともに石油省に向かっていった。そして、サウジが捕まえているテロリストを解放するわけがないから、このままではポールは処刑されてしまうと

危惧(きぐ)していた。サウジが懸命の搜索を開始しポールの囚われている沙漠のサソリのアジト発見に努めていることは分かっていたが成果の無いままに時間は過ぎていった。

石油省に向かう車の中で、石渡は、慎太郎に話しかけた。

「池波君。テレビで見たが、沙漠のサソリが米国人を誘拐して、サウジ政府に対し彼等の仲間を解放しなければ処刑すると脅しているらしいね」

「専務もご覧になりましたか。とうとう最悪の事件が起きてしまいました」

と慎太郎は応えた。

「このようなことがいつどこで起きるか分からないとなると、君のことが心配だ。そろそろサウジを引き揚げた方が良くないかね」

石渡は心配そうな顔をして慎太郎に聞いた。

「お心遣い有難うございます」

と応えると、ちよつと間を置いて慎太郎は続けた。

「確かに沙漠のサソリの攻撃は多様化していますし、より巧妙になって来ています。しかし私には無差別ということでは無いように思えます。自爆テロの場合には、かなり攻撃目標が絞られています。具体的には政府の治安中枢の建物、外国人の多く居住するコンパウンドなどです。これに對しましては、サウジ側もかなりの警戒体制を敷いています。ここを攻撃し成果をあげるのは容易なことではありません」

「確かに、最近は大きな被害が出ていないね。しかし、このところ、欧米人を中心に、かなりの人が殺されているんじゃないか」

「仰る通り、最近は、軍関係者だけでなく、民間人もかなり殺されています。彼等も狙いやすい民間人に照準を合わせてきたようなところもあります」

「そうになると、今回のケースもそうだが、サウジ政府としても、沙漠のサソリから欧米人を守りきれないのではないかね」

「そうですね。ただ、これまでは、殺害された場所が必ずしも安全と言えないところだったので、そのような場所に行かないよう注意することで防げるとも言えます」

「そうかね。君がここに滞在する時にも随分と心配したが、そう聞くと多少安心できる」

「ただ、例外の無いルールはありませんから万全の注意を払う必要はあります。実は、あの誘拐されたアメリカ人は私の知り合いなのです。彼が狙われたのは、彼が軍に相当深い繋がりがあったからだろうと推測出来るのですが、どうして誘拐されてしまったのかは未だに想像が付かないのです」

それを聞いて石渡が驚いたところで、慎太郎達の乗った車は石油省のゲートの前で止まった。

「池波君、そのアメリカ人の話は後でまた話してくれ」

石渡はそう言ってテロの話を終えた。

石油省は、治安問題を担当する内務省に次いで過激派の攻

撃対象となっていることからその警備はものものしかった。

ゲートの回りは、自爆テロ対策用のコンクリートブロックが敷き詰められていた。ゲートの両脇には機関銃を持った兵士が何人もいて、テロリストが車でゲートを突破し省内に入することは不可能だった。

林のように外交官プレートの乗用車でくればフリーパスだったが、民間の車は厳しくチェックされる。もちろん、訪問者の身元は厳重にチェックされる。

チェックが終わると、ようやくゲートに設けられた遮断機が上げられる。

中に入ると、さらにゲート脇に受付があり、ここで訪問先の氏名等が聞かれ受付から関係先の確認をとることになる。慎太郎達がアリの名前を口にすると、受付の態度が、いきなり親切になった。

慎太郎達は車を進め石油省の駐車場に入った。駐車場脇には兵士達の休憩所が置かれていた。車を降りると、いつも通りの灼熱の日差しを受けながら休憩所の前を通り短い階段



を上がって玄関に入った。

玄関には空港にあるようなチェックゲートが設けられている。手荷物はX線検査装置を通し訪問者もX線透過装置の付いたアーチの下をくぐらなければならない。手荷物の中にパソコンがあれば綿密に調べられる。これは例え大臣のアポ(面会予約)があっても同じだった。

このような煩雑さは安全のためには仕方の無いことだと、慎太郎は思っていたし大分慣れて来ていた。しかし、石渡には到底馴染めないことがその顔から明らかだった。

「飛行機もそうだが、最近、セキュリティ・チェックが厳しすぎるように思える。相手を見て判断するようにした方が良いのではないか」

などと言い不満気だった。

石油省のエレベーターは、円筒形をしていて、まるでSF映画に出てくる宇宙船の中のエレベーターのようだった。

大臣室の前にある秘書室に着くと、慎太郎は待っていたハリド秘書官にアラビア語で挨拶をした。

「アツサラーム・アレイコム」

「アレイコム・サラーム」

「シントロウ、相変わらず元気そうで結構だね。大臣はおまちなだよ」

とハリドはニコニコしながら応えると、慎太郎、石渡の二人を従え大臣室の扉を開けた。

大臣室は広々としていて豪華な応接セットが中央に置いてあった。その奥には立派なデスクがあつてアリ石油相は黒い本革製の椅子に座っていた。アリはその豪華な椅子からゆつくりと立ち上がると笑顔で二人を迎えた。

「アツサラーム・アレイコム」

アリに先に挨拶されてしまつて二人は慌てて応じた。

「アレイコム・サラーム」

続いて、アリは、いきなり慎太郎と抱擁すると、まず左側の頬そして次に右の頬を合わせた。さらに軽く頬にキスをし

た。慎太郎は、このアラブ式の親しい知人達などとの挨拶には慣れていたが、まさかアリからそのように扱われるとは思っていなかった。多少戸惑いを感じていた。

アリは次に石渡にも同様の抱擁をした。ただ、今度は、石渡の慣れない仕草から察したのか、あるいは意識的に慎太郎と差別をしたのかは定かではなかったがキスマではしなかった。

石渡は頬を赤らめながら、お礼を言った。

「閣下。光栄です」

予想をしなかったアリの矢継ぎ早の行動に二人が戸惑っているうちに、アリは二二日のパーティー出席の礼を言うと、今度は予想もしない意外な質問をしてきた。

「ミスター・イケナミ、君は二二日に米国人が沙漠のサソリに捕まったのを知っているかね」

「ええ、知っています」

慎太郎は、答えながら何故アリが唐突にこのような話をしたのだろうかと思っていた。

「このようなことがあると、イラクで米国に積極的に協力している日本の国民たる君はサウジを逃げ出したくなつたのではないか」

アリは慎太郎に聞いた。

慎太郎は、アリが日本人も沙漠のサソリの攻撃目標になつてゐることを知つていたのには驚かされた。

これまで、彼の接してきた普通のサウジ人は、そのようなことには気付いていない。アジア人はテロ対象に入つていないから大丈夫だなどと言つていた。

彼等からみれば、日本は遠い国であり、東南アジア諸国と中国、韓国、日本も一緒だつた。

米国のテキサスカーボーイはバーボンとビフテキがあれば幸せで他には何の必要もないし関心もない。日本などどこにあるのかさえ全く知らない。

慎太郎はそれと同じようなものかもしれないと思つてゐた。

もつとも、普通の日本人も、どれほど中東の国々のことを知っているのだろうかと考えると心許なかった。果たして、サウジアラビア、クウェート、バーレーン、イラン、イラク、カタール、オマーン、そしてイエメンなどについてその差をどれだけ知っているのだろうか。

慎太郎が躊躇しているとアリは続けた。

「我が国は、世界で一番安全な国だから、君には是非リヤド滞在を続けて欲しいと思っている」

確かに、米国では同時多発テロが発生し、その象徴の世界貿易センタービルが破壊されたし英国でも地下鉄爆破テロなどが発生している。アジアでもインドネシアからトルコまで爆弾テロが横行している。

それはそうに違い無いが、サウジが世界一安全とは言い過ぎではないかと慎太郎は思っていた。しかし、とにかく、アリは慎太郎にリヤドに居て欲しいと思っているのだ。

慎太郎は、その気持ちが嬉しかった。

「閣下、私が当地に来てから既に半年が過ぎました。この間、サウジの友達も出来、前回赴任時に比べると、サウジの生活にも大分馴染みました。ここのところ、テロが激化してはいませんが、本社さえ許してくれば、あと、半年滞在を延長してみたいと思っています。」

慎太郎は、思い切って答えた。

「そうかね。有難う。ミスター・イケナミには、わが国の石油施設もゆっくり見て欲しいと思っている。年末にはカティーフの石油施設開所式もある。リヤドにある主要国の大使も招待する予定だが、そこに君を特別に招待するよう手配しよう。その前に東部にある石油施設を一通り見てはどうだろうか。いつでも手配してあげるよ。」

アリは相好を崩していた。

石渡は石油省に着いた時には、慎太郎に日本に帰ることも勧めたほどだったが、この思わぬ展開に驚いていた。

「閣下、それでは、池波君の意思を尊重して、早速、本社と池波君のリヤド滞在延長を検討します。」

ただ、石渡には慎太郎がそのような応えをしそうなことは石油省に着いた時の応答でわかっていた。これで特命事項が一步前進するかもしれない。アリには本社と検討するとは言ったが、石渡が全て決められることは、石渡はもちろん慎太郎も十分に承知していた。これで、慎太郎のリヤド滞在は少なくとも半年は延長されることになったようなものだった。

「ところで、閣下、一月にダス・インド石油ガス相が来られたようですが、インドは中国と並んで石油需要が大幅に伸びており、将来も大きく伸びる国ですから、貴国の今後を考えると大変好ましいことですね」

と石渡は話題を少し変えてみた。

「その通り。わが国とインドの関係を深めることは大変重要なことだと思っている。我が国王陛下、皇太子殿下もそのようなご認識だ。それに、既に、わが国には一五〇万人を超えるインド人が働きに来ている。わが国とインドはこれまでも様々な面で協力関係にあった。それに、この間のパーティーの時に焚いた香木はインドからのものでベトナムの伽羅(き

やら)が輸出禁止となっている今、最高級のものとなっている。インドは国内でも石油だけではなく、天然ガスそれに石炭を生産している資源国でもある。しかし、石油について言えば、国内で生産している原油だけでは、とても伸張する需要を賄えないので、わが国に相当量を依存することになる」

アリはさらっと言うてのけた。慎太郎の聞いていた製油所建設に関する話は出なかった。

「閣下、中国についても同様な協力が進められているようですが、中国の場合は製油所を共同で建設する計画がかなり具体化しています。インドについてもそのようなことが言われていますが、いかがですか」

慎太郎は水を向けてみた。

「もちろん、インドともその方向で進める予定だ。ただ、インドには無数の計画があつて、どの程度実現性があるのかはなかなか分かり難いところがある」

と応えながら、何事にも勘の鋭いアリは、ずばりと聞いた。

「日本は下流部門中心だから、このようなことに興味がある



のだね。君達もわが国との共同事業に関心があるのかね」

「当社は、石油会社ではありませんから、日本での共同事業には関心があるわけではありません」

と石渡は応えた。

「そう言ってくれると有難い。日本は、今後、石油需要は伸びそうもないし、実は共同事業ではこれまでに苦い経験があるからね」、

「日本は本当に独特な国だ。以前、クウエートが当時ゲティが持っていた三友石油株を取得しようとした時にも横槍が入って実現しなかった。それに、我が国が大日本石油の松下製油所で共同事業をしようとした時にもスムーズにことが運ばなかった。ようやく、この間、前からのつながりもあり、日本ロイヤルオイルの株を取得出来ただけだ。困った国だ」

中国人は、昔のことを決して忘れないと言うが、サウジもかなり昔のことを忘れないで根に持っていることがわかった。日本人は、何でも都合よく水に流してしまうものだが…

アリのこれまでの日本の石油政策に対する印象があまり

良く無いことがわかって、石渡は、プロジェクトKの話を持ち出すのに躊躇した。しかし、折角、下流部門の話が出たことだし、滅多にアリに会えるわけではない。石渡は思い切って話を切り出した。

「実は、中国の石油下流部門で何かご協力出来ればと思っ  
ているのです・・・」

石渡は緊張しながら、アリの反応を探ってみた。

「中国は、わが国からすればインドより遠いから、そこで、  
貴社の協力を得られるというのは有り難い。いずれ、ミスタ  
ー・イケナミからでも、その話を詳しく聞かせて欲しいもの  
だ」

アリはおもむろに口を開いた。石渡はアリの思いも寄らな  
い、前向きの発言に、サウジに来た甲斐があったと安堵して  
いた。これで今後の慎太郎の交渉に後を託せる。

石渡は、アリとの会談が終わると、その日の内にリヤドを  
発っていった。慎太郎のリヤド滞在延長は決まっていたよう  
なものだったが、リヤド空港を発つ際の石渡の言葉で慎太郎  
はそれを再確認した。

石渡は、慎太郎に対し、治安の悪化は心配だが、特命事項の実現に向けアリの要請もあったことだしリヤドで引き続き励んでくれと依頼した。

ただし、身に危険が迫りそうだったら、いつでもリヤドを脱出するようにとの言葉も忘れなかった。

サウジ政府は、ポール誘拐事件についてテロリストの要求を飲まない、テロリストとは交渉しないという基本姿勢を貫いていた。そして一万五〇〇〇人以上の治安部隊を動員して懸命の捜索を行っていた。しかし、テロリストの隠れ家発見、逮捕には至っていなかった。

米国のメディアは、この誘拐事件を大きく取り上げ、ポールの解放を訴える声が米国全土からあがっていた。テロリストのウェッブサイトにも解放を要請する書き込みが行われていた。

慎太郎は、十六日に、アリとの会談実現に力添えをしてくれたスルタンに、お礼を言おうと連絡をとった。

電話に出たスルタンは、プリンス・アブドルラフマンを紹介したまでで大したことはしていないと、いつもの調子だった。あっさりしたものだ。恩着せがましいところなどは一切無い。

ただ、スルタンは普段の飄々(ひょうひょう)としたところはなく、かなり緊張していた。その理由はすぐに分かった。スルタンもテロリストに誘拐されたポールの知り合いだったのだ。彼の解放を慎太郎以上に切に望んでいた。

「ポールは、私のことをまるで子供のようによく可愛がってくれてね。彼は二〇年ほど前にサウジに来て軍隊整備に大きく貢献してきた。それにサウジを第二の故里として親しんで来た彼のような人がこのような目にあうのは大変理不尽なことだ。何とか助けられないものかと思っている。今回の件では、プリンスからも捜索に協力するよう言われたので、私なりのネットワークを使って、及ばずながら全力を尽くしていると

ころだ」

スルタンがサウジ南西部・アルバハの豪族であることは分かっていたが、これでサウジ政府にはそれ以上に貢献していることがわかった。得たいの知れない人物だった。

「誰にも言って欲しくないのだが、実は、沙漠のサソリのリーダーに近い人物を知っていてね。明日にでも隠れ家を割りだせる段階まで来ている」

スルタンは、慎太郎を信頼していたので、そこまで言ってくれた。慎太郎は、スルタンのネットワークをさすがだと思っただけで、テロリストに近い筋を知っているというのは不気味なことだとも思った。スルタンはテロリストと何等かの繋がりでもあるのだろうか。そんな懸念が慎太郎の脳裏をよぎった。慎太郎の懸念をよそに、スルタンは再会を約束して電話を切った。

翌十七日には、サウジ政府は、一二〇〇軒以上の家々を戸別に尋問する一方、沙漠、ほろ穴なども含めリヤド郊外一〇

キロメートルまでのところを虱(しらみ)潰しに搜索したが何も見つからなかった。

サウジ政府は相変わらずテロとの交渉は一切行わないという立場を貫いていた。米国政府もテロとの交渉は一切行わないという立場を常に表明していた。

米国政府は約二〇人のF B I特別捜査官をリヤドに派遣するなどして協力していたが、慎太郎は、米国政府は冷たいものだと言っていた。ちょうど、病人が病んでいる臓器を切り離して生き残るように、沈着冷静に犠牲者を切り離す行動をとっているのではないかと考えていた。

それは戦闘の際などの基本的な考え方もかもしれないが、切り離されたものは辛い。

アリゾナ・コンパウンドについて米国大使館高官の評価を聞いた時もそうだった。アリゾナは広大なところだから、例えば、ロケット弾で攻撃を受け誰かが死ぬなど部分的な被害を受けても他のものが無事逃げられればそれで良いというような見解を述べていた。多数を助けるためには多少の犠牲は仕方が無いという冷徹なスタンスだ。今回もそうならなけ

れば良いかとポールのことを案じていた。

昨日、スルタンは今日までにテロリストの隠れ家を特定できそうだと言っていた。どうなったのか気になったが、再度スルタンに電話をすることは出来なかった。

そして、とうとう処刑の日、一八日の金曜日になってしまった。慎太郎は自分のことのように気が気ではなかった。するといきなり慎太郎の携帯に電話が入った。スルタンからだった。慎太郎の懸念は当たった。

「慎太郎、ポールがとうとう処刑されてしまった。犯人達はその模様をインターネットを通じて公開したわずかその数時間後に治安部隊が隠れ家に突入し主犯者を射殺した。一足違いだった。私は、昨日、隠れ家を治安部隊に連絡しておいたのに何故救えなかったのかと不思議に思っている。無念だ。悲しい」

スルタンは相当混乱し悲嘆にくれているようだった。

慎太郎はただ黙って聞いているより他はなかった。

サウジでは、通常、金曜日に、モスク前の広場で斬首刑を行う。テロリスト達は、それに則るように金曜日を処刑の日に選んだ。まるで、自分達はイスラムに則り正義を実践しているとも言いたそうな選び方だった。サウジの場合は、斬首刑になるものは、大体、処刑前に魂の抜け殻のようになって呆然としているらしい。

ポールは諦めるわけにはいかなかった。脳裏には愛する妻スパポーン、愛する息子、そして姉と、次々にその顔が浮かんだ。必死で抵抗した。

猿轡をかまされて声は出なかったが精一杯唸った。後ろ手に縛られた動かない両手を力一杯動かそうとしたが、ますます綱が食い込むばかりだった。最後の力をふりしぼって巨体を動かしたが、やがて力は尽きた。

そして、屈強なテロリスト二人が両側から強い力でポールを押さえつけ、前に突き出された首に大きな鉈のようなナイフが振り下ろされた。

サーツと鮮血が周囲に飛び散った。



インターネットには三枚の写真が掲載された。一枚は、首を切られたポールの胴体とその後ろに転がるナイフの刺さったポールの首の写真で、一枚目はテロリストの手が首を持ち上げている写真、そして三枚目が胴体と数枚の様々な角度からの首の写真を合成したものであった。

「この米国人は死に値する。彼は幾多のムスリムが蒙った苦しみと同じ苦しみを味わった。我々は今後も、イラク、アフガニスタン、パレスチナ、そしてアラビア半島で犠牲となった人々に報いアラアの敵と戦い続ける。これは、イスラムに戦いを挑む米国人に対する報復であり、わが国にやってきたものへの戒めだ。これが彼等の定めだ」

テロリストは高らかにそう宣言した。

今回斬首事件には四人のテロリストが関与していたが全員射殺された。射殺されたテロリストの中には、リヤドの沙漠のサソリのリーダー及び最重要指名手配者リスト中のもも一人含まれていた。リーダーは、アフガニスタンでオサ

マ・ビン・ラディンと共にイスラム防衛のため、当時のソ連軍と戦い、その後、ボスニア、アルジェリア、ソマリアと転戦してきたという。一月八日のムハヤ・コンパウンド爆破、五月二九日のアルコバールでの襲撃事件にも関与していたとのことだった。

スルタンは、慎太郎にリーダーに近い人物を知っていると電話で言っていた。スルタンの知っているという人物は一体どうなったのか。射殺されたテロリストの中に入っているのだろうか。隠れ家を治安部隊に教えたスルタンは、彼が通報したことがわかればテロリストに狙われるに違いない。

治安部隊もスルタンがシェイクという高い地位にあるとはいえ、今度の通報によりテロリストに近いことがわかったのだから捜査の手を伸ばさない筈がない。訊問するようなこととはないだろうが厳しい目が注がれることになるだろう。

今後、スルタンの動きは、官憲とテロリストの双方から徹底的にチェックされるのではないか。折角、友達になれたのに、慎太郎はこれまで通りには付き合えなくなるのではない

かと心配していた。それに、なによりもアシールの将来を真剣に考えているシェイクの命運は、サウジの安定性にも係わって来るのではないかと考えていた。

この斬首事件を受けて、米国国務省は、サウジに滞在する米国人に対する退避勧告、及びサウジへの渡航中止の勧告を発表した。また、米国大使館、領事館についても必要最小限の人員を残しサウジを離れるよう命令した。

これらの事件は欧米人に対する無差別テロであり、欧米人は、いつどこで襲われるか分からないという恐怖心から続々とサウジを離れていった。

長い間サウジに住みサウジのために尽くして来たポールがサウジ人に誘拐され惨殺された意味あいは相当に重かった。